

今年に入り、すでに北京五輪への出場が決まっていた日本代表チームは国内で強化合宿を行っていた。その中で日本代表から話を受け、小野は1月中旬から約3ヶ月間のホッケーの派遣留学に来た。それは、「さくらジャパン」の小野に対する期待の表れだったといっても過言ではない。

小野は、今年のAHLにおいて、他チームと比べると決してチーム力が高いとは言えなかったNT代表でプレーをした。相手チームのプレッシャーから、ボールを持って慌ててパスミスをしてしまうチームメイトが多い中、やはり、小野の落ち着きぶりやボールのコントロール、パスの正確さや質は群を抜いていた。

「パス、プリーズ!!」

パスを求め、ボールを持った仲間の名前を呼ぶ小野の大きな声が、スタジアムに何度も何度も響く。

フリーになって、ボールを持った選手の近くまで寄り、パスを求める。しかし、なかなか思ったようにももらえず、慌てて出されたボールは相手選手に取られてしまったり、味方のトラップミスで相手ボールになることが多かった。その度に、小野は「なぜ?」というように、パスが来なかったことに対し、首をかしげた。

「自分に今無いのは自信で、自信をもっと付けていきたいですね。試合前は、『自信』という言葉自分を投げかけています」

小野は、自分に足りないものについてこう語った。

もちろん大会中はNT代表チームの一員として、勝利に貢献し、チームが昨大会(結果は7位)以上の成績を目指すことは自身

の目標としても掲げており、大切なことであった。しかし、今回はそれ以上に、日本代表の合宿から離れて来ているからには、北京五輪に向けた自身のスキルアップと自信にしなければ、という思いが強かった。その中で、試合中に自身のプレーをする機会が限られてしまっていたことが、小野の戸惑いや焦りに結びついてしまっても仕方がなかった。

しかし、そうした状況でも小野は自身の成長を模索していた。

例えば、オーストラリアと日本のホッケーの違いの1つは、ボールを持ったときの全選手の積極的な姿勢と小野は言う。そして、大会序盤でパスを出す役割を堅実に果たしていた小野が一試合ごとにチームの戦術の違いはあったとしても一大会最終戦ではボールを持つと自分で突破をしてゆく場面が目立った。

小野は、感じとったことをすぐに、果敢に試みていた。そして、「これまでは、ボールを持ったらパス先を探していたけど、前にいける自信が持てた」と収穫を語った。

また試合中、「英語は苦手」と言っていたが、全く臆することなく、ジェスチャーを交えて、自分の考えをチームメイトに伝えていた。明るい笑顔と裏表のない性格で、チームメイトやコーチ陣に親しまれ、信頼されていた小野。動きや言葉の一つひとつが語る小野のホッケーへの情熱と発想は、確実に試合を重ねるごとにチームに浸透し、最終戦ではパスをもらう機会が格段に増えていた。

小野は諦めず、その時自分にできること、感じたことを繰り返し、確実にスキルアップをしていた。

本誌記者がみる

次への 一歩

小野 真由美

北京五輪代表最終選考を抜け、代表メンバーの一員として、北京の空に掲げられる日の丸を背負うことが今の小野の次である。全ては、小野が今自身の唯一の目標と語った「自分のホッケーを五輪の舞台で表現し、チームに貢献して金メダルをとる」、その夢のために。

最終戦の後、小野は今後の意気込みについてこう語った。

「(今回の滞在で)自分の足りないものが明確になったので、日本に帰ってしっかり練習して、もっともっと伸ばして、もっと良い選手になりたいと思います」

その時、「もっと」という言葉が多いのに気が付いた。そして、小野の「自信がない」というのは、それを理由に引き下がる意味のものではなく、「もっと、もっと」という向上心に繋がっているものだと感じた。目標が高ければ高いほど、そこに登り着くには「もっと」という向上心は必要になる。

オーストラリアで得た様々な経験は、たくさんの発見と課題を小野に与えた。それは、ホッケー選手、小野真由美の次への一歩となり、その後の大舞台での活躍に必ず繋がるだろう。

